



名大トピックス

No.138 平成16年11月30日発行 名古屋大学総務企画部総務広報課 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Te(052)789-2016
http://www.nagoya-u.ac.jp

全学同窓会第3回総会・講演会・懇親会が開催される



CONTENTS

・全学同窓会第3回総会・講演会・懇親会が開催される.....	2	・エトピア科学研究機構が中部電力株式会社と連携実施協定を締結.....	27
・野依良治理化学研究所理事長に特別教授の称号を付与.....	7	・エトピア科学研究機構が環境パートナーシップ・CLUBと連携実施協定を締結.....	28
・赤崎名誉教授が文化功労者として顕彰される.....	8	・評価企画室が発足する.....	28
・古川為之氏を招き「古川記念館」の銘板除幕式を挙げる.....	10	・大学院工学研究科が社会連携室を新たに立ち上げる.....	29
・本学を当番校として国立大学法人化後初の七国立大学長会議を開催.....	11	・博物館所蔵「栄衛中経図」の解説完了.....	29
・平成16年度高等研究院研究プロジェクト採択者が決定.....	12	・博物館野外観察園セミナーハウスの本格的活用がはじまる...	30
・大学院医学系研究科博士課程後期課程設置記念式典・講演会等を開催.....	14	・平成16年度医学部医学科公開講座を開催.....	30
・テクノ・フェア名大 2004 が開催される.....	16	・農学国際教育協力研究センターが第6回オープンフォーラムを開催.....	31
[研究ナウ]		・附属農場が農業教育公園・自然観察会を開催.....	31
・われわれの法文化の由来 筏津 安恕.....	18	・平成16年秋の叙勲受章者が発表される.....	32
・ソフトリソグラフィーを使ってメカノバイオロジーを研究する 成瀬 恵治.....	20	・メンタルヘルスクエア講習会を開催.....	32
・大学院留学生特別コース及び医学系研究科医療行政コース入学式が挙行される.....	22	・平成16年度名古屋大学職員創作美術展を開催.....	33
・大学院生命農学研究科等が第15回アジア農科系大学連合隔年会議を開催.....	23	・平成16年度愛知地区国立大学法人等退職準備セミナーを開催.....	33
・法政国際教育協力研究センターと大学院法学研究科がモンゴル国とウズベキスタン共和国で国際シンポジウムを開催.....	24	[名大生のスポーツ&イベント]	
・附属図書館が「館長と話そう! 2004」を開催.....	25	・名古屋大学体育会発足50周年記念式典を開催.....	34
・博物館第35回特別講演会「脳神経外科医療の歴史と進歩」を開催.....	26	[イベントカレンダー].....	35
		[本学関係の新聞記事掲載一覧] 平成16年10月分	36



全学同窓会第3回総会・講演会・懇親会が 開催される

全学同窓会第3回総会・講演会・懇親会が、10月17日(日)、豊田講堂及びシンポジオンホールにおいて開催されました。当日は、好天にも恵まれ500人近い参加者が緑豊かになった東山キャンパスを訪れました。

総会は、名古屋大学交響楽団の演奏で始まり、豊田章一郎会長(トヨタ自動車株式会社名誉会長)と平野総長のあいさつの後、全学同窓会と本学の役員が紹介されました。最後に、代表幹事の伊藤附属図書館長からスライドを使って会務報告がありました。

総会と講演会の間には、70名余の男性合唱団OBによる合唱(若き我等、Das Lied、巴里の若者の唄)が行われ、大変好評でした。

講演会では、本学が国立大学法人として新たな第一歩を踏み出したということで、平野総長が「名古屋大学の法人化と展開」と題して講演しました。平野総長は、大学の現状について、経営的な数値を示しながら、今後の大学運営についての決意を述べました。

また、豊田講堂のロビーでは、大学文書資料室の協力で、名古屋大学キャンパスの歴史的な変遷や最近建設された建物のパネルや模型が展示され、解説の冊子も無料で配布されました。

懇親会は、シンポジオンホールに場所を移し、岡田

邦彦副会長(株式会社松坂屋取締役社長)の司会進行で行われました。歓談中には、支部役員や部局同窓会役員を紹介、本学のサークル「フォルクローレ同好会」による演奏が行われ、会は1時間半の予定を超えて、盛況のうちに終了しました。

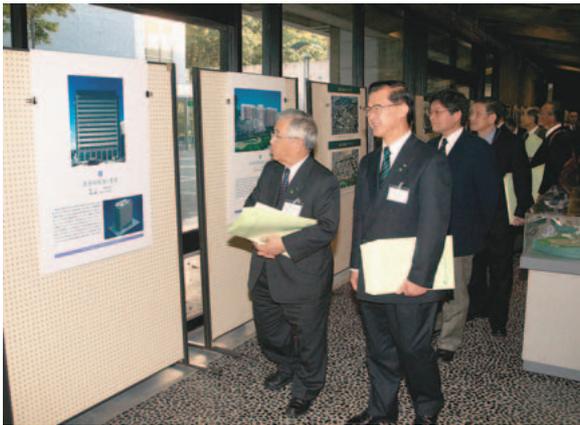
なお、当日は法学部同窓会、理学部・理学系研究科同窓会が、東山キャンパスで全学同窓会と連携して行事を行いました。

名古屋大学全学同窓会

名古屋大学全学同窓会(NUAL = ニューアル(Nagoya University Alumni Association))は、国立大学の法人化に向けて、大学と社会の連携がますます重要になることから、平成14年10月27日に設立されたもので、約10万人の会員がいます。また、本学の同窓会は、卒業生だけでなく本学関係者すべてを構成員とする新しいタイプの同窓会で、国内だけでなく国際的にも貢献することを目的としています。



男性合唱団OBによる合唱



大学文書資料室の展示を見る豊田会長と平野総長



講演する平野総長



会務報告をする伊藤附属図書館長



フォルクローレ同好会による演奏



懇親会で歓談する平野総長



懇親会の様子

豊田章一郎名古屋大学全学同窓会会長の総会あいさつ



まず、最初に皆様と名古屋大学全学同窓会の創設2周年をお祝いしたいと思います。今日、卒業後、初めて母校においでになった全学同窓会の会員の方もおられると聞いておりますが、このキャンパスも樹木が大きくなり、新しく高層の建物も続々と建っており、母校のキャンパスの変わり様に驚かれたと思います。

名古屋大学全学同窓会では、一昨年には、丹羽副会長などの尽力により関東支部が立ち上がり、東京フォーラムに代表されるように、関東地区での名古屋大学と産業界との産学連携などで、全学同窓会が名古屋大学に積極的に協力しています。また、平成8年4月に浜松を中心に静岡県西部に在住または在職の名古屋大学の卒業生の同窓会として設立されていた遠州会に全学同窓会支部として、昨年加わっていただきました。また、来る11月17日には、関西支部の立ち上げも予定されております。関西支部の設立後は、中国、タイおよびインドネシアなどの海外支部設立の計画も持っております。寄付講義や学生支援などで、まだ、わずかずつではありますが、着々と全学同窓会の活動を進めております。

一方、名古屋大学は今年の4月に国立大学法人として新たな一步を踏み出されておりますが、大学を取り巻く厳しい環境の中、COEの獲得や産学連携のための東京フォーラムおよび関西フォーラムの開催など、非常にかんがっておられ、卒業生として大変喜んでおります。

この7月には、平野総長のご決断により、名古屋大学の全ての卒業生・修了生に対して「名古屋大学および名古屋大学全学同窓会からのお知らせとお願い」を出し、名古屋大学と全学同窓会の状況と決意をお知らせすることができました。今後とも、このような活動を是非とも継続していただきたいと思います。

名古屋大学が国立大学法人になっても、名古屋大学の伝統である清新で自由闊達な気風は変わることがないと思っております。国立大学法人化によって、個性化と自律性が求められる名古屋大学は、社会との連携がますます必要であり、そのために大学と卒業生との密接な連携協力が強く求められていると思います。名古屋大学全学同窓会が設立時の理念として掲げた「大学と社会を結ぶ必須の組織」となるようにますます皆様と一緒に努力したいと思っております。

名古屋大学は全学同窓会会員の皆様方と連携協力して、「名古屋大学学術憲章」にありますように、教育、研究の創造的な活動を通じて、世界屈指の知の創成と将来を担う勇気ある知識人を育成することによって社会に貢献していただきたいと思います。地域社会の文化、政治、経済、産業などさまざまな課題の解決や将来の発展に向けても努力していただきたいと思います。

前回の総会でも申し上げましたが、私は、具体的には名古屋大学に常に3つのことを期待しております。1つ目は、大学としての国際競争力の強化に向けた取り組みであります。2つ目は、

今厳しい状況にあります日本の国を変える大学を目指してほしいということです。自律性を持った大学が変われば人々の意識も変わり、国も変わっていくはずで。3つ目は、高い志と情熱を持った人材、すなわち将来社会のリーダーとして活躍できる人材の育成です。高い目標を掲げ、まじめに真剣に、そして創意工夫を重ね努力して、部下や仲間をリードしていく自律性のあるリーダーの養成です。

名古屋大学のアイデンティティーをしっかりと確立して、名古屋大学の強みを伸ばし、弱みを克服していく改革に、名古屋大学と全学同窓会は手を携えて立ち向かいたいと思います。

名古屋大学全学同窓会は、財政基盤の確立など、まだまだ多くの問題を抱えておりますが、ここにお集まりの皆様方を始めとして、全学同窓会会員と一緒に、名古屋大学全学同窓会の設立理念を達成したいと考えておりますので、なにとぞ物心両面のご協力の程、お願い申し上げます。

平野 眞一名古屋大学総長の総会あいさつ



ただ今紹介のありました、総長の平野でございます。

日頃、皆様方が本学の運営を暖かく見守っていただいていることに感謝いたします。

本日は、豊田会長はじめ役員の方々、全学同窓会の皆様方に大勢お集まりいただきまして、大変ありがたく感謝しております。

また、ただ今は豊田会長から過分のお言葉をいただきまして感激している次第でございます。

ご存知のとおり名古屋大学は本年4月1日をもちまして、国立大学法人名古屋大学となりました。

大学の個性化、多様化が進む中で、人的交流を通じて社会に対して大きく貢献できるよう努めて参りたいと存じます。

名古屋大学は、自由闊達で、国際性豊かな学風のもと、世界第一級の研究成果を挙げるとともに、専門教育の面はもちろんでございますが、教養教育の面におきましても非常に高い評価を得ております。これは一重に同窓生の方々のご活躍とご関係各位のご支援、ご鞭撻のおかげであると感謝いたしております。

自分が卒業した大学、在学する大学、関係された大学に、愛情や誇りを持っていただくことなくして、今後の名古屋大学の発展はございません。大学を顧みていただけるよう名古屋大学の発展に努めます。

名古屋大学全学同窓会を通じて、卒業生、在学生、教職員の皆様が交流を深め、互いに特別な親しみや感情、信頼、さらには助け合いの精神が生まれることにより、名古屋大学は真に社会に開かれた大学として発展していくものと信じております。

同窓生に対する大学からの情報発信、サービスなどは、まだ不足している感は否めませんが、今後は最善の努力を尽くしていく所存でございます。

昨年は、12月に関東同窓会の協力も得て、東京フォーラムを開催いたしました。本年は、11月17日(水)に関西フォーラムを大阪国際交流センターで開催するとともに、その際に、全学同窓会関西支部設立総会の開催が予定されております。

関西支部の立ち上げによりまして、関東支部、遠州会と合わせまして、3つの支部が設立されることとなり、大変うれしく思っております。

さらに、海外におきましても同窓生の会が組織されることになっていると聞いております。現在、大学には約1,200名の留学生が学んでおり、精神的な支えになることを期待しております。

ここで少し、最近の名古屋大学の活動状況を紹介させていただきます。

- ・本年度は、法学研究科に実務法曹養成専攻(法科大学院)を設置し、また、工学系のセンター等を統合し、エコトピア科学研究機構を設置しました。
- ・高等研究院及び教養教育院においても教育・研究を活発に展開しております。
- ・21世紀COEプログラムについては、3年続けて採択され、現在14件の拠点プロジェクトが活動しています。
- ・特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)は、2年続けて採択されております。
- ・国際交流につきましては、全182の外国の大学・機関等と大学間協定又は部局間協定を結び交流を図るとともに、アカデミックコンソーシアム21(AC21-提案校は本学であり、また、常にヘッドクォーターとして拠点を置いています。)の活動といたしましては、第2回の国際フォーラムをシドニー大学と共催(シドニー市)で、7月に開催いたしました。次回は、2006年にイギリス・ウオーリック大学で開催の予定です。
- ・産学官連携活動及び社会連携・貢献事業も積極的に推進しています。
- ・その他としましては、新しい建物として、IB電子情報館、野依記念物質科学研究館、野依記念学術交流館、理学館等が竣工し、経済学部総合館も改修されているところであります。このようなことから、学内の雰囲気が変わったと感じられるとともに、10月6日には地下鉄が環状線として開業し、また、昨年の12月には、名古屋大学駅が設置され、とても交通の便がよい大学となっております。さらに、この地域の多くの方々にもキャンパスを訪れていただいております。

名古屋大学が、日本はもちろん世界の一流の大学にならねばならないということは、よく承知をいたしております。同時に地域の方々との強い連携を図り、大学をさらに発展させていきたいと考えております。

全学同窓会と本学との関わりにつきましては、本学の中期目標及び中期計画の中に、社会連携を推進するために、全学及び部局同窓会の強化を図り、同窓会を介して社会との連携に大いに努めるとうたっております。

どうか広い意味での母校に対するご助言、ご支援、ご鞭撻をお願い申し上げまして感謝の言葉といたします。今後ともよろしく願いいたします。



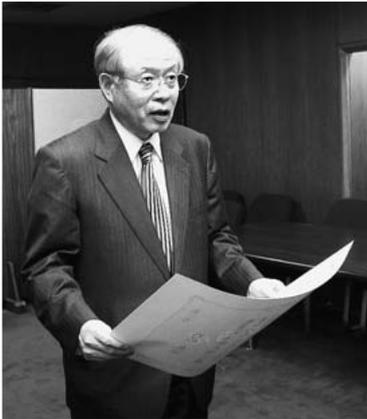
野依良治理化学研究所理事長に 特別教授の称号を付与

本学は、10月26日(火)、野依良治理化学研究所理事長に、名古屋大学特別教授の称号を付与し、称号授与式を11月11日(木)、総長応接室において執り行いました。

特別教授は、本学の大学教員または本学の大学教員であった者のうち、ノーベル賞、フィールズ賞、文化勲章、文化功労者又はそれらと同等の研究教育活動の功績をたたえる賞若しくは顕彰を受けた者に対し付与されるものです。

野依理化学研究所理事長には、これまで本学特任教授としての称号を付与していましたが、同人の同意を得た上で、10月26日の教育研究評議会の議を経て、特別教授の称号が付与されました。

称号授与式は、平野総長をはじめ、役員出席のもと行われ、平野総長から、野依特別教授に対し、今後も本学の研究に対し大所高所からご指導をお願いしたいとあいさつがありました。



辞令書を受け取る野依特別教授



野依特別教授を囲んでの記念撮影



赤崎名誉教授が文化功労者として顕彰される

赤崎 勇名誉教授が、今年度の文化功労者に選ばれ、11月4日(木) 東京都内のホテルにおいて、顕彰されました。本学では、平成10年の野依良治特別教授以来、8人目の栄誉となります。

赤崎名誉教授は、本学在職中の1985年に、最高純度の窒化ガリウム (GaN) 結晶を世界で初めて創製し、これを用いて、1989年に、「GaN_p-n 接合型高性能青色発光ダイオード」を世界に先駆けて開発しました。当時、光の3原色のうち最も難しいとされていた「青」色を発光する半導体の開発は不可能とされていましたが、その常識を覆す世界初の快挙でした。赤崎名誉教授が開発した青色発光ダイオード(青色LED)は、豊田合成株式会社により実用化され、現在、信号機や大型ディスプレイなどに広く利用されています。

また、赤崎名誉教授が開発した青色LEDの特許料を活用して、本学では、「赤崎記念研究事業」をスタートさせ、2001年には、大学院工学研究科に「赤崎記念研究センター」を創設しました。さらに、「赤崎研究交流館(仮称)」を建設することを決定し、建設の準備を進めているところです。

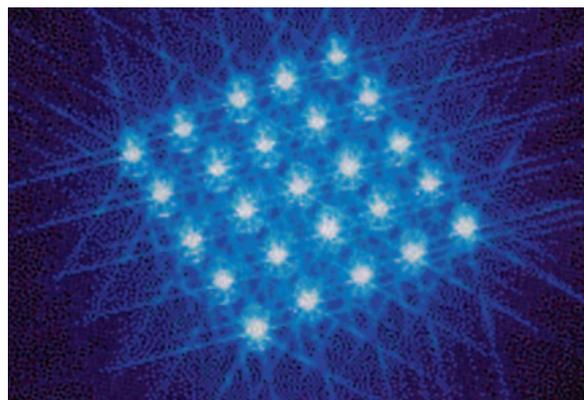


[プロフィール]

1929年1月30日生れ。1952年3月京都大学理学部卒。4月神戸工業(株)(現:富士通株)入社。1959年4月名古屋大学助手(工学部電子工学科)同講師、同助教授を経て、1964年4月松下電器産業(株)入社、東京研究所基礎第4研究室長、同半導体部長等を経て、1981年8月名古屋大学教授(工学部電子工学科)。1987年3月新技術事業団GaN系青色発光ダイオード研究開発責任者。1992年3月名古屋大学定年退職、同名誉教授、名城大学教授(理工学部電気電子工学科)1993年~2001年科学技術振興事業団GaN系短波長半導体レーザー研究開発責任者。1996年7月名城大学ハイテク・リサーチ・センター代表研究者。2001年4月名古屋大学赤崎記念研究センター兼務。



青色LEDが輝く豊田講堂時計台



世界初のGaN_p-n接合型青色LED(1989年)発光させている1つのLEDの光がウェハー内を透過し、周縁で反射している。

祝辞

この度、本学名誉教授 赤崎 勇氏が文化功労者として榮譽に輝かれましたことは、誠におめでたいことであります。

ことに、名古屋大学在職中に進められた研究が評価され本榮譽を受けられました点で大学として大変名誉なことであり、心から嬉しく思います。

先生のご研究は、高性能 GaN 系 p-n 接合青色発光素子を実現され、半導体研究に革命を起こされました。この研究は、豊田合成株式会社の御努力を得て、実用化されており、さらに情報の高密度記録・高速処理を可能にするなどエレクトロニクスの新分野を開くことなどが期待されています。

本学においては、先生のご功績を讃え「赤崎研究交流館(仮称)」を建設することを決定し、建設の準備を進めております。

この度の榮譽により、本学の研究教育活動が大いに奨励され、併せて我が国における学術研究が更に一層強力に推進されることを心から信じて期待しております。

総長 平野 眞一

赤崎勇先生が文化功労者顕彰をお受けになられましたことについて、先生が名古屋大学に在職された工学部・工学研究科を代表して心からお喜びを申し上げます。先生は、本学部に電子工学科が創設された昭和30年代に助手・講師・助教授として在職され、半導体の気相成長に関する研究を行われました。その後、企業の研究所で化合物半導体の研究に従事され、半導体と光をキーワードに幾多の研究成果を挙げられました。昭和56年に名古屋大学に戻られた後は、青色発光素子開発の基盤となりました高品質 III 族窒化物結晶の育成に関する研究を進められました。先生の窒化物半導体に関する一連の研究成果は、白熱電灯や放電管に頼ってきた光源を省エネルギー型の固体素子に置き換えることに継がり、ガス灯を白熱電灯に置き換えたエジソンの発明に次ぐものと言われております。このような研究が名古屋大学で行われたことを誇りとして、この喜びを学生諸君にお伝えしたいと思います。

工学研究科長・赤崎記念研究センター長 澤木 宣彦



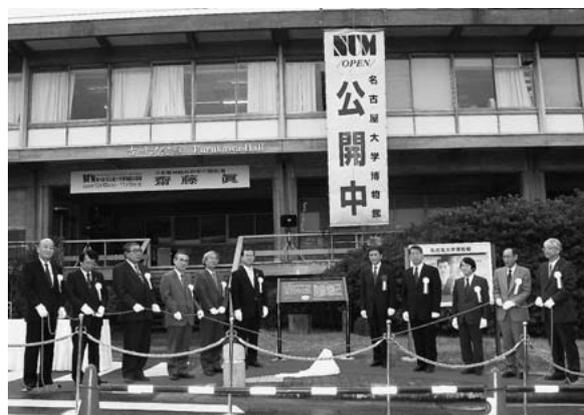
古川為之氏を招き 「古川記念館」の銘板除幕式を挙

古川記念館の銘板除幕式が、11月11日(木)、古川記念館前において、故古川為三郎氏・志ま夫人のお孫様の古川為之氏を招いて挙行されました。

除幕式では、あいにくの小雨にもかかわらず、全学からの約150名の教職員が見守る中、平野総長のあいさつの後、総長、古川氏、理事、監事、足立博物館長及び鈴木年代測定総合研究センター長により、古川記念館の由緒を記した銘板の除幕が執り行われ、併せて、玄関上の銘板も除幕されました。

古川記念館は、昭和39年、古川為三郎氏(日本ヘルルド映画株式会社社長)・志ま夫人から建設資金の寄附をいただいて、「古川図書館」として建設されたもので、昭和63年には、再度、古川氏の寄附によって整備され、現在に至っています。同館の建設にあたり、建設費2億円を地元官民各界から資金援助を受けて建設する計画でしたが、資金繰りがなかなかつきませんでした。こうした状況のなか、名古屋市水道局長の松見三郎氏の協力により、古川ご夫妻から建設費の2億円が寄附されました。

その後、昭和56年に新中央図書館が完成した後は、「古川総合研究資料館」となり、現在は名古屋大学博物館や年代測定総合研究センターなどが入っています。



銘板除幕式の様子

近年は、建物を使用している施設名を併記することが多くありましたが、古川氏の寄贈の意などを汲んで、「古川記念館 Furukawa Hall」と称し、学内外に認識してもらうために、銘板が設置されました。

なお、同館の玄関を入った正面の壁に掲げられている古川為三郎氏・志ま夫人の記念プレートには、「この図書館は本学の教育と研究に資するため古川為三郎氏・志ま夫人の篤志によって寄贈されたものである」と刻まれています(詳細は、名大トピックス116、130号「ちょっと名大史」9、23に掲載されています。)



古川記念館の由緒を記した銘板



古川為三郎氏・志ま夫人の記念プレート



本学を当番校として 国立大学法人化後初の七国立大学長会議を開催

- 今後の国立大学のあり方について意見交換 -

本学を当番校として国立大学法人化後初の七国立大学長会議が、10月28日(木)、名古屋市内のホテルにおいて開催されました。

会議には、国会開催中のところ文部科学省から近藤信司文部科学審議官、清水 潔研究振興局長、徳永 保大臣官房審議官をはじめ7名の方々に出席いただき、協議事項 法人化後の課題では、知的財産の活用につ



開催のあいさつをする平野総長



文部科学省を代表し、出席された近藤信司文部科学審議官

いて、我が国の高等教育のあり方では、高等教育の質の保証について、国立大学における学術研究のあり方では、質の高い研究者の養成について、文部科学省からのご意見をj得て意見交換を行いました。

さらに、要望事項として、京都大学から提案のあった施設整備費等の確保について全会一致で採択し、文部科学省に要望することとし、また、次期当番大学を東京大学にお願いして、会議は終了しました。



会議風景



平成16年度

高等研究院研究プロジェクト採択者が決定

平成16年度高等研究院研究プロジェクト採択者が、9月21日(木)、教育研究評議会で公表されました。

高等研究院は、本学を代表する研究者を擁し、世界の最高水準の学術研究を目指す研究専念組織として、平成14年4月に創設されました。高等研究院は、本学が将来の知的資産としての価値を認めた独創性の高い学術研究を、文系・理系分野を問わず集中的に推進し、

その成果を全学的な研究活動の活性化に生かすとともに、広く社会に還元することを目的にしています。

これまで平成14年度の第1回研究プロジェクト公募で15件、平成15年度の第2回公募で13件のプロジェクトが採択されています。

今年度は、宇宙論から分子生物学、ナノテクノロジー、文献学に至る幅広い領域から計11件が採択されました。



高等総合研究館 (IAR Hall)



共同実験室 (高等総合研究館内)

平成16年度高等研究院研究プロジェクト採択者一覧

研究タイプ *	研究プロジェクト名	研究代表者			期 間
		所 属	職名	氏 名	
	生態系ダイナミズムに着目した物質探索法	大学院理学研究科	教授	上村 大輔	H16 .10 .1 ~ H21 3 31
	生体パターン形成原理の実験的ならびに数理解析的解明	大学院理学研究科	教授	近藤 滋	H16 .10 .1 ~ H21 3 31
	バイオ化学 IC を基盤とする次世代医療ナノデバイスの研究	大学院工学研究科	教授	生田 幸士	H16 .10 .1 ~ H21 3 31
	計算科学フロンティア	大学院工学研究科	教授	金田 行雄	H16 .10 .1 ~ H21 3 31
	プラズマプロセスを用いたナノ情報デバイスの開発とシステム応用	大学院工学研究科	教授	水谷 孝	H16 .10 .1 ~ H19 3 31
	生理活性発現分子機構に基づく生物活性物質の創製	大学院生命農学研究科	教授	磯部 稔	H16 .10 .1 ~ H21 3 31
	統計的宇宙論の研究	大学院理学研究科	助教授	松原 隆彦	H16 .10 .1 ~ H19 3 31
	脊椎動物の季節性測時機構の解明	大学院生命農学研究科	助手	吉村 崇	H16 .10 .1 ~ H19 3 31
	イオン輸送をターゲットにした植物の生長分化制御の分子基盤	生物機能開発利用研究センター	教授	魚住 信之	H16 .10 .1 ~ H19 3 31
	生物時計分子装置の原子レベルでの分子機構の解明	遺伝子実験施設	教授	石浦 正寛	H16 .10 .1 ~ H19 3 31
	ソシユールの草稿の生成論的研究	大学院文学研究科	教授	松澤 和宏	H16 .10 .1 ~ H19 3 31

* 研究タイプ (大型研究費を伴う研究)

外部資金(出資金事業等を含む。)を伴う大型研究、COE 性を発揮した新たな展開を目指す研究など、本学を代表し、かつ、世界をリードすると期待される研究

研究タイプ (萌芽的研究)

従来の研究分野の枠を越えた新しい分野を創出することをめざす研究

研究タイプ (知の体系化・総合化をめざす研究)

分散する知識や成果を体系化・総合化することにより、飛躍的に価値ある知的フレームワークの創造・展開が期待される研究



大学院医学系研究科博士課程後期課程 設置記念式典・講演会等を開催

- 医療の研究発展をめざす教育者・研究者を育成 -

大学院医学系研究科は、10月15日(金)、メルパルク NAGOYA (郵便貯金会館)において、平成16年4月に設置された博士課程後期課程(看護学専攻、医療技術学専攻及びリハビリテーション療法学専攻)の設置記念式典・講演会及び交歓会を、学内外の関係者約180名の出席のもと開催しました。

この博士課程後期課程は、近年の医療の高度化、少子高齢化の進行、疾病構造の複雑化など保健医療を取り巻く状況が大きく変化し、チーム医療の構築をはじめ、健康に対するニーズも一段と多様化するなか、独創的かつ真理の探求心に富む研究者・教育者及び人間の尊厳を尊重しうる高度の保健医療専門職の育成を目的に設置されたものです。なお、平成14年4月に、同研究科修士課程に、看護学専攻、医療技術学専攻及びリハビリテーション療法学専攻が設置され、平成16年3月には、58名が修了しました。

記念式典・講演会は、古池医学部保健学科長の開式の辞で始まり、第1部の記念講演では、「保健学科における博士課程のあり方」をテーマに、島内 節東京



開式の辞を述べる古池医学部保健学科長

医科歯科大学大学院保健衛生学研究科長による「博士課程に期待するもの」、石川 齊神戸大学副学長による「医療従事者の大学院教育の現実と将来展望」と題する講演が行われました。第2部の記念式典では、杉浦医学系研究科長の式辞の後、平野総長から「看護学専攻、医療技術学専攻及びリハビリテーション療法学専攻は、人類の健康に寄与し、人類の幸福に真に貢献す



講演する島内東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科長



講演する石川神戸大学副学長



式辞を述べる杉浦医学系研究科長



あいさつする平野総長

るために、総合保健医療の発展、チーム医療の構築と推進、さらに、日進月歩の医療を支える医療テクノロジーの開発を担う独創的かつ真理の探究心に富む研究者、教育者を育てるとともに、人間の尊厳を尊重し得る人材を養成できると確信しております。」とあいさつがありました。続いて、来賓の石野利和文部科学省高等教育局医学教育課長、松尾 稔名古屋大学前総長、高田重男金沢大学医学部保健学科長（天野良平金沢大学医学部教授が代理）から将来への展望を含む意義深い祝辞が述べられました。

続いて行われた交歓会では、山下副総長のあいさつ

に続き、各専攻領域関連の職能団体代表者から祝辞が述べられた後、加藤延夫愛知医科大学理事長・学長（名古屋大学元総長）の発声により乾杯が行われ、参加者全員で博士課程後期課程の設置を祝いました。最後に、古池保健学科長から、謝辞とともに将来に向けた決意が述べられ、会は終了しました。



祝辞を述べる石野文部科学省高等教育局医学教育課長



祝辞を述べる松尾名古屋大学前総長



代理で祝辞を述べる天野金沢大学医学部教授



テクノ・フェア名大 2004 'が開催される

- 智慧と創造で未来を刻む -

大学院工学研究科は、9月30日(木)、IB電子情報館において、「テクノ・フェア名大 2004'-智慧と創造で未来を刻む-」を大学院環境学研究科、大学院情報科学研究科及びエコトピア科学研究機構の共催を得て開催しました。

これは、大学にある技術シーズ(種)の展示、研究室公開、講演会等を通じ、大学の研究成果を広く公開し、新規産業の創出や既存産業の技術の高度化を推進する機会を設け、より一層の「産学官連携」を目指し



あいさつする澤木工学研究科長

ていくことを目的に開催されたものです。今回は、平成11年に名古屋市中心企業振興会館で初めて実施した総合的な研究成果の公開から数え5回目、また、研究シーズ紹介を主な内容とする催しとしては3回目の開催となります。

当日は、中部経済産業局や愛知県をはじめとした中部地区の経済及び企業の研究開発担当者等約800名に加え、本学関係職員約200名の来場がありました。

午前中に行われた講演会では、澤木工学研究科長による「産学官連携に新たな息吹を」と題したあいさつの後、福田敏男工学研究科教授による「ロボット技術の進歩と将来」及び高井 治エコトピア科学研究機構教授による「超はっ水の拓く世界」と題する講演が行われ、会場は、250名余りの参加者で満員となり、立ち見がでるほどの盛況となりました。

また、展示会場においても、企業の研究開発担当者等が多数訪れ、各ブースの担当者に実用化に向けての相談や活発な意見交換を行うなど、企業側が同フェアに対して、高い関心と大きな期待を寄せていることを伺わせました。特に、「からくり人形展」の実演コーナー



講演会を聴講する参加者



研究室見学



ブース担当者の説明を聞く平野
総長



車両・モーター制御の研究を目的として改造されたEV



来場者で賑わう展示ブース会場

(末松良一工学研究科教授)「バリアフリー社会を目指した個人用知的移動体」の試乗コーナー(長尾 確情報科学研究科教授)では、多くの人が足を止め、実演を見入ったり、実際に体験したりと、終日賑わいをみせていました。

さらに、午後からは、出展者の中から分野等を考慮し選ばれた4名の教員が、展示されている研究の概要を説明するミニ講演会が行われました。この講演会にも臨時に席を設けるほど多くの人々が詰めかけ、講演者の話に興味を持ってメモを取りながら耳を傾ける姿が見られました。

今年度は、研究室見学の申込みが昨年よりも増加し、具体的に共同研究へ向けて動き出した研究室も数多く

見受けられるなど、成果も年々目に見えてあがってきています。

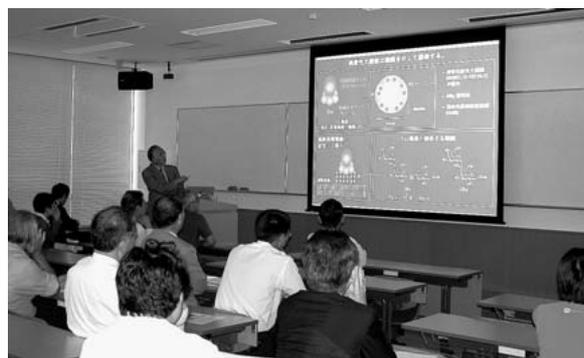
なお、同研究科では、この成果を報告書にまとめ、さらに産学官連携を推進していくことにしています。



「からくり人形展」の実演コーナー



「バリアフリー社会を目指した個人用知的移動体」の試乗コーナー



ミニ講演会



われわれの法文化の由来

筏 津 安 恕

2002年の12月に、ミュンヘン大学のあるシリーズの一冊として出版されたわたしの研究 (Yasuhiro Ikadatsu, *Der Paradigmawechsel der Privatrechtstheorie und die Neukonstruktion der Vertragstheorie in seinem Rahmen* Pufendorf, Wolff, Kant und Savigny, München Universitätschriften · Juristische Fakultät, Abhandlungen zur Rechtswissenschaftlichen Grundlagenforschung, Bd. 89, Elsbach 2002. 158p.) をご紹介したいと思います。同書は、「私法理論のパラダイム転換と契約理論の再編」を論じたものです。

この研究は、1994年の9月から一年あまりの在外研究ではじめた研究で、すでに出版していた『失われた契約理論』(昭和堂、1998年)と『私法理論のパラダイム転換と契約理論の再編』(昭和堂、2001年)を基礎としてまとめたものです。

同書は、いっさい日本の事情には触れていませんが、日本的な問題関心に由来しています。わたしは、われわれの法文化はどこからきて、いまどこにいるのかということを知りたいと願ってきました。もちろん、どこに向かって進むべきかという問題を考えるためです。そのためには、わが国の近世私法史とヨーロッパ法の継受問題の解明が必要だと思われます。わたしの課題は、後者の問題領域に属します。われわれは、一体なにをどのようにヨーロッパ法から継受したのかという問題です。

この問題自体は以前から論じられている古い問題なのですが、この問題を解明するために、わたしは、わが国の法継受の母法となった、フランス法系とドイツ法系の条文を直接比較するのではなく、私法理論の「法的思考原理」の相違と「体系配列」の意義を解明する



Yasuhiro Ikadatsu, *Der Paradigmawechsel der Privatrechtstheorie und die Neukonstruktion der Vertragstheorie in seinem Rahmen* Pufendorf, Wolff, Kant und Savigny

ことから着手しました。フランス法系の理論を比較的純粋に表現した哲学者としてプーフェンドルフを再評価し、ドイツ的な法的思考原理を比較的純粋に表現した哲学者としてカントを解釈し直すことで、私法史のコンテクストを新しく解読することができました。この夏には、「ドイツ啓蒙の自然法論から理性法への転換を解明するという難しい課題を引き受けた、・・・薄いが、思考は濃密で、深く掘り下げた本」だというサヴィニー雑誌上の書評にも接することができました。

ヨーロッパ大陸法系の偉大な発明品である私法についての制定法文化は、一般理論の成立を前提としますが、私法の一般理論は、17世紀の後半になって、ようやく成立しました。プーフェンドルフが、義務中心の思考体系にもとづいて契約を中心とした私法の一般理論を確立したのです。それを、カントが権利中心の思考体系へと転換しました。さらにサヴィニーが、これを実定法理論へと応用してドイツに特有の近代法学を確立したのです。私法理論が、義務の体系から権利の体系へと転換したのに対応して、私法体系の配列も、契約理論の構造も転換したというのが、同書の内容です。

わたしの研究によって、フランス法系とドイツ法系の私法理論の関係が少なくとも原理的な点では、解りやすくなったのだと思います。ヨーロッパ人、とりわけドイツ人には見えていないことが、見えてしまったのだといえるでしょう。EUの政治的統合下で統一法への夢をはせるヨーロッパの人々にとっては、両法系の関係を精確に認識することは現代的課題でもあるのです。ミュンヘン大学では「逆輸入だ」という言葉も耳にしました。

なぜこういうことが生じたのでしょうか。ほかの分野でもしばしば起こることでしょうが、一度権威的な学説が支配すると、そこから抜け出すのに、50年、100年単位の歳月を要することがよくあります。パラダイム転換が生じると、しばらく「通常科学化」の時代がつづくといってもよいでしょう。一度、義務中心の思考体系から権利中心の思考体系への転換が生じると、

「権利の体系がある」ことを前提とした研究が進められ、義務の体系を構築した著作が無視され、ついには忘れられてしまいました。その結果、権利の体系が成立するにいたった「経路」が説明できなくなってしまったのです。

個別具体的な訴訟ごとに制定された訴権の集合体であるローマ法が、いかにして権利の体系へと翻訳されたのかということが主要な関心となり、ドイツ啓蒙の義務中心の思考体系のはたした役割が忘れられてしまったのです。現在では、こうした研究史上の欠陥を克服するために、「義務の体系のもとの私法の一般理論の誕生」が人類のいかなる知的遺産のもとで成立したのか、という課題と取り組んでいます。

プロフィール

いかだつ やすひろ



昭和25年生まれ。名古屋大学法学研究科博士課程単位取得退学。現在博士（法学）。昭和58年名古屋大学教養部講師、同助教授、情報文化学部助教授、同教授をへて、平成12年環境学研究科教授。専門は、法思想史・法理論。研究は、ヘーゲル法哲学の形成原理から始めましたが、それと平行してわが国の法継受問題にも関心を抱いていました。その後、この二つの問題関心が一つに合体したのをかわきりに、ヨーロッパ私法の思考原理の解明と歴史のコンテクストの読み直しの研究に着手しました。現在では、研究史上あまり手のつけられていないスペインの後期スコラ学派からドイツ啓蒙にいたる知的遺産の継承発展の関係を研究しています。



ソフトリソグラフィーを使って メカノバイオロジーを研究する

成瀬 恵治

わたしたちは周りのいたるところからメカニカルストレスを受けています。地球に住んでいる限り常に重力を受けています。無重力状態になると骨代謝が変化します。普段何気なく音を聞いていますが、音波が鼓膜を振動させ内耳にある有毛細胞の毛を揺らすことによって電気信号に変換しています。胸に手をあててください。鼓動を感じるはずですよ。1分間に60回規則正しく拍動し、血圧は正常に保たれています。物に触れ、硬いものかやわらかいものかを感じることが出来ます。

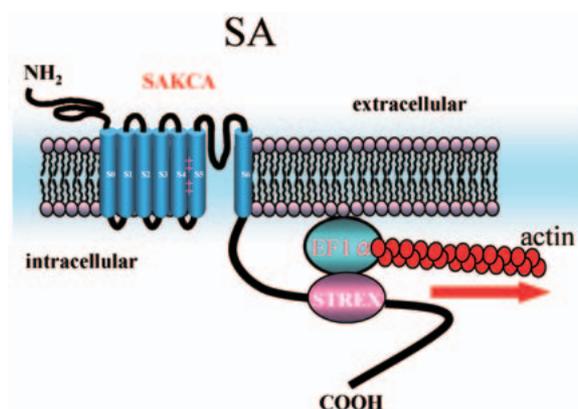
このように、メカニカルストレスを細胞内情報に変換し、うまく適応することによって我々は日常生活をおくっています。

しかしながら、その受容応答のメカニズムには数々の不明な点があります。本プロジェクトではメカノ受容体 細胞内情報伝達機構 細胞応答までを含めたメカノトランスダクション機構の解明を主目標とし、メカノバイオロジーという新しい分野の研究をしています。

もうひとつの特徴は半導体製造技術を応用したソフトリソグラフィー (Soft Lithography) 法をバイオの技術と融合させることにより、通常の細胞生物学的・分子細胞学的アプローチのみではなしえなかった、従来の研究分野の枠を越えた新しい分野を創出することも特色のひとつです。本プロジェクトでは以下の題材を中心に研究を推進しています。

1. 機械受容チャネルの分子生物学と細胞生理学

Touch に代表されるような機械刺激を受容するリセプターのひとつとして機械受容チャネルが想定されています。このチャネルの電気生理学的研究は広く行われてきましたが、その分子実体は長い間不明でした。私たちは真核生物から世界ではじめてカルシウム透過性機械受容チャネル (Mid1) の単離・同定に成功し (Science 1999) また近



心筋からクローニングされた機械受容 (SAKCA) チャネルの活性化模式図。細胞骨格がチャネル分子に結合し膜伸展を伝える。

年、心筋より新しいタイプの機械受容チャネル (SAKCA) の単離・同定に成功し、更に、機械感受性責任部位の同定およびそのメカニズム解明に一步近づきました。このチャネルはヒト心筋・血管平滑筋などに分布していることが確認され、血圧調節機構などに関与している可能性があると考えています。またこのチャネルの機械感受性に対する阻害剤の候補を発見したので循環器疾患発症のメカニズムの解明、新しいメカニズムの循環器病薬の開発に繋がるものと確信しています。

2. 機械受容の生理学

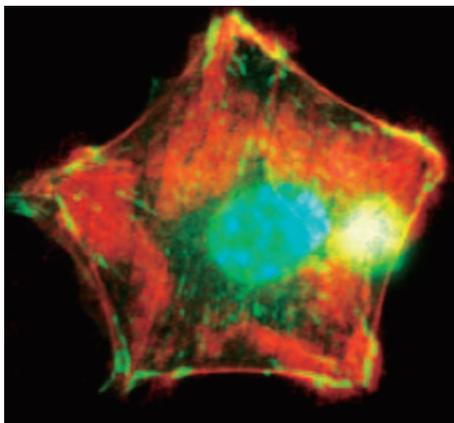
心・血管系組織には血流から常にメカニカルストレスを受けています。短期的には血管作動性物質放出による血管トーンスの恒常性の維持、中・長期的には細胞増殖などによる組織のリモデリングが起こっています。また高血圧症・動脈硬化などの病態との関連が示唆されています。独自に開発した定量的・高再現性ストレッチ装置により、ストレッチ刺激に対する細胞応答 (細胞内情報伝達 (Ca²⁺))

機構の解明、核転写因子活性化機構、増殖反応など)に関する研究を行っています。また最近では、組織レベル・個体レベルでの機械受容-応答研究も開始しました。血管リング標本張力測定伸展装置を開発し新規機械受容チャネル(SAKCA)の生理的役割の解析を行っています。また Boston 大学と共同で NIH グラントを獲得することができ肺気腫発症におけるメカニカルストレスの影響に関する研究を行っています。

3. ソフトリソグラフィー

細胞の「かたち」により細胞の「機能」がコントロールされていることが判明してきました。半導体製造技術をバイオに応用(soft lithography)し、細胞接着因子を培養基質にプリント(μ contact printing)することにより細胞を任意の形にコントロールすることができます。この技術を用いれば、cell-cell contact が無い細胞集団などといった特殊な培養条件を作り出すことができ、また、四角・三角・円形細胞なども作り出すことができます。この手法により独自に開発したストレッチチャンバーに細胞接着班のパターニングを行い、ストレッチ刺激時の細胞骨格・細胞接着班の再構成、細胞内情報伝達機構を解析しています。

ソフトリソグラフィーのもうひとつの利用法にマイクロ流路があります。この中では2種類の液体は層流(laminar flow)を形成する性質を相容し単一細胞に複数の液性刺



マイクロコンタクトプリンティング法で細胞接着タンパク質をプリントした上に血管内皮細胞を培養した。

激を加えることに成功しました(Nature, 2001, US patent: PARTCEL)。また、この流路内では高ズリ応力刺激(shear stress)を与えることができます。機械刺激のひとつであるズリ応力に対する細胞応答の研究もこの装置を用いておこなっています。

もう一つの応用として運動精子を簡便に選別することができ、これを不妊治療に用いるプロジェクトも進行しています。

このように、いわゆる生理学だけではなく工学的手法もどんどん取り入れて研究を進めています。医学系研究科には修士課程もあります。学部を問わずどんどん若い優秀な人材を求めています。

プロフィール

なるせ けいじ

1988年名古屋大学医学部卒業。1992年名古屋大学大学院医学研究科修了。医学博士。

イオンチャネル、特に Touch などの機械刺激を生体電気信号に変換する機械受容チャネルに興味をもったのがそもそもの始まりで医学部生時代から

伊藤文雄名誉教授の生理学教室に入り浸った。同教授の戒めの「既存の概念にとらわれるな」により生化学講座、病態制御癌細胞研究部門、国立共同研究機構生理学研究所などで様々な研究概念・手法を学んだ。更に卒業後、ノースカロライナ大学チャペルヒル校神経生理学で電気生理学、ハーバード大学医学部で細胞生理学とリソグラフィーによる細胞パターニング技術を学んだ。

趣味：ギター・ゴルフ

knaruse@med.nagoya-u.ac.jp





大学院留学生特別コース及び 医学系研究科医療行政コース入学式が挙行される

大学院法学研究科、工学研究科、環境学研究科留学生特別コース及び医学系研究科医療行政コース入学式が、10月27日(水) 豊田講堂第1会議室において挙行されました。

大学院留学生特別コースは、開発途上国などでニーズの高い分野において、短時間に学位を取得したいという要望に応じて、日本語を用いず、英語による研究指導を行うコースで、留学生の大半は、大学推薦による国費留学生で占められています。また、同コースは、従来の留学生受け入れ形態と異なり、英語で授業等が行われるため、人気が高くなっています。

秋季入学式は、昨年度から、医学系研究科修士課程医科学専攻医療行政コースが設置されたことに伴い、従来の留学生特別コースに医療行政コースを含めて実施することになり、今年度は、大学院法学研究科6名、大学院工学研究科5名、大学院環境学研究科4名、大学院医学系研究科11名の計26名が本学で学ぶことになりました。

式典は、総長、理事、研究科長の列席のもと、名古屋



入学式の様子

屋大学交響楽団による奏楽で始まり、入学生紹介、総長の辞、役職員等の紹介に続き、大学院医学系研究科のSOIPOVA Mashhura(ソイポヴァ マッシュフーラ)さん(ウズベキスタン)が入学生総代として宣誓を行いました。

式典終了後には、総長、理事をはじめとする列席者、陪席の指導教員らを変えて記念撮影が行なれ、入学生は、これからの学生生活に期待を膨らませていました。

大学院留学生特別コース

コース名	設置年	内容	課程	期間	受入規模(1年)
法学研究科総合法政専攻留学生特別コース	平成11年	実践的国際関係、国際経済法、立法、司法、政治、行政、法執行制度に関する研究	博士課程前期課程	2年	8人程度
工学研究科社会基盤工学専攻留学生特別コース*1	昭和61年	土木工学	博士課程後期課程	3年	5人程度
環境学研究科地球環境科学専攻留学生特別コース	平成14年	大気水圏科学系	博士課程後期課程*2	3年	6人程度

*1 設置時は、土木工学専攻。平成16年4月から専攻名変更。

*2 設置時は、博士課程前期課程。平成14年10月から変更。

医学系研究科医療行政コース

コース名	設置年	内容	課程	期間	受入規模(1年)
医学系研究科医療行政コース	平成15年	医科学	修士課程	1年	10人程度



大学院生命農学研究科等が 第15回アジア農科系大学連合隔年会議を開催

- アジア農科系大学連合における遠隔教育のための E-learning System の確立 -

大学院生命農学研究科、農学国際教育協力研究センター、生物機能開発利用研究センター及び AC21は、9月28日(火)から30日(木)までの3日間、野依記念学术交流館において、第15回アジア農科系大学連合 (Asian Association of Agricultural Colleges and Universities (AAACU)) 隔年会議を開催し、アジア14か国からの44名の参加者を含む約200名の参加がありました。

アジア農科系大学連合は、1972年に設立され、アジア諸国における農林水産業の健全な発展に貢献するために、農学分野における学術の振興をはかることを目的として活動しており、現在、アジア全域の16か国から48機関が加盟しています。隔年会議は、地域集会 (Regional Workshop) と並び、AAACU の活動の根幹をなしており、各加盟機関の長 (学長、学部長等)、教育者、研究者、大学院学生等が参加し、最新の研究成果、各国の抱える教育・研究上の諸問題について情報と意見の交換を行います。AAACU は、農学及び生物産業における遠隔教育を促進するためのプロジェクトをかねてより計画しており、今回の会議をきっかけとして、AAACU 加盟校の間で、本格的な E-learning の運用を開始するためのプロジェクトを、大学院生命農学研究科、農学国際教育協力研究センター、生物機能開発利用研究センター及び AAACU が中心と

なって立案しました。こうしたことから、今回の会議は、「アジア農科系大学連合における遠隔教育のための E-learning System の確立」をテーマに開催されました。

会議では、最初に、平野総長、松田生命農学研究科長から歓迎のあいさつがあった後、来賓の原文部科学省国際課国際協力政策室国際協力調査官、岩元独立行政法人国際農林水産業研究センター理事長から祝辞が述べられました。続いて、平野総長による「名古屋大学国際学術コンソーシアム21プログラムにおける国際交流・教育」、松岡 信生物機能開発利用研究センター教授による「新世紀の食を担う植物バイオサイエンス (21世紀 COE プログラム)」等の基調講演が行われました。また、今回の会議の目的である E-learning system (WebCT) を用いたカリキュラムの確立、AAACU 会員校間での同カリキュラムの実施方法の策定等について、今後も促進することが決議されました。

本学の農学系の研究科及びセンターは、AC21との連携をさらに強化しつつ、AAACU という組織と人的資源をおおいに活用して、国際的視野に立った農学の教育と研究、特にアジア地域の自然と風土に根ざした実践的教育とフィールド科学研究を一層発展させていく予定です。



あいさつする平野総長



参加者による記念撮影



法政国際教育協力研究センターと大学院法学研究科が モンゴル国とウズベキスタン共和国で国際シンポジウムを開催

法政国際教育協力研究センター（CALE）と大学院法学研究科は、文部科学省科学研究費補助金（特定領域研究）「アジア法整備支援～体制移行国に対する法整備支援のパラダイム構築～」により、モンゴル国とウズベキスタン共和国で国際シンポジウムを開催しました。

モンゴル国では、9月10日（金）、11日（土）、モンゴル日本センターにおいて、モンゴル国立大学法学部、モンゴル国立法律センター、モンゴル土地管理局との共催で、国際シンポジウム「モンゴル国における土地法制の諸問題」を開催しました。同研究科は、1994年以来モンゴル国立大学法学部と交流を進めてきましたが、モンゴル国でシンポジウムを開催するのは今回が初めてで、当日は、実務家、研究者20名の報告が行われ、200名が聴講しました。モンゴル国では1990年の民主化以後、政治的民主化と市場経済化が進められ、2002年には土地私有化法を採択しました。しかし、遊牧を基幹産業とするモンゴル国では、土地の私有化に対する抵抗が国民の間では根強く、また、牧地の破壊による環境破壊の危険性も指摘されており、モンゴル国における法整備の中で最も重要な課題とされています。そのため、同シンポジウムは大きな注目を集め、当田達夫特命全権大使をはじめ、S オオン国会副議長、モンゴル国に駐在する国際機関専門家や外国人研究者も参加して興味深い議論が展開されました。なお、シンポジウムの内容は、モンゴル語・日本語・英語で出版する予定です。

また、ウズベキスタン共和国では、9月18日（土）、19日（日）、タシケント法科大学及びウズベキスタン司法省との共催で、国際シンポジウム「司法改革と国民参加」を開催



ウズベキスタン共和国でのシンポジウムの様子

しました。CALEによる同国でのシンポジウム開催は、今回で3回目となります。当日は、60名の参加のもと、アブドゥラーエフ第一副首相による開会あいさつ及び報告をはじめ、日本側及びウズベキスタン側の研究者から多彩な報告が行われました。興味深い議論として、ウズベキスタン共和国では独立後に司法改革が進められており、司法への国民参加が課題となっています。今でもソビエト法システムに基づく制定法をもち、また、シャリアーやアダート（慣習法）という伝統法が規律する地域共同体があるウズベキスタンで、これらの法意識をもつ国民が司法に参加する意義と問題点について、率直な意見交換が行なわれました。特に、伝統法によって家事紛争や隣人紛争を処理している地域共同体（マハリヤ）の調停委員会を正式の裁判所に改組する問題では、ウズベキスタンの法律家の間で賛否の意見が飛び交い、この問題の重要性と解決の困難性が伺われました。さらに、ウズベキスタン共和国の司法改革と国民参加について、日本のそれと比較することにより、その問題点を明らかにすると同時に、共通する課題も認識することができました。

CALEでは、体制移行国における法と社会の研究を続けてきましたが、来年度はこれまでに蓄積した理論研究とアジア各国の直面する法律問題に関する事例研究を踏まえて、体制移行諸国の法整備に関する比較研究の国際シンポジウムを開催するとともに、研究叢書の刊行を開始する予定です。



モンゴル国でのシンポジウムの様子



附属図書館が「館長と話そう！2004」を開催

- 学生利用者と附属図書館長との懇談会（第2回） -

附属図書館は、9月28日（火）中央図書館5階の小会議室で、学部学生、大学院学生の図書館利用者と附属図書館長との懇談会を、昨年に引き続いて開催しました。

懇談会は、留学生2名を含む、学部学生3名、大学院学生5名の計8（男性6、女性2）名が参加して、茶話会形式で行われ、参加者からの附属図書館への意見や要望に対し、伊藤附属図書館長から説明や回答があり、活発な意見交換を行いました。

環境整備に関しては、参加者から以下のような要望等がありました。

返却が遅れた場合などの督促のメールが、普段使っていない情報メディア教育センター支給のアドレスへ来るので、携帯宛にしてほしい。

OPACで検索して、貸出予約などができるようにしてほしい。

電子ジャーナルは、非常に有用なので、使えることの広報が重要であり、今後はe-Bookも導入してほしい。

日経テレコンなどのデータベースを無料で学生も使えるようにしてほしい。

東洋学関係の資料の貸出などがマニュアルであるが、目録データの遡及入力の対象になっているのか？

これらに対し、メールアドレスについては、利用者各自で情報メディア教育センターから支給されているメールを転送設定してほしい、貸出予約など個人サービスについては、システム化を検討中であり、また、電子ジャーナルの利用法などについては、メールなどで周知したらどうかというアイデアも出ました。e-Bookについても今年導入する予定が示され、全学的な情報環境の改善の動きがあることが紹介されました。

次に、利用条件や利用環境に関して、参加者から以下のような意見や要望が出されました。

土日など休日の開館時間を延長してほしい。

学習用図書の出借冊数が少なく、貸出期間も短い。

自動貸出装置とはどんなものか？

フランス語の図書のような表紙の柔らかい資料の保存には、公共図書館のようにビニールカバーを付けたらいいのではないか。

私費のコピー機がまだ少ないのではないか。また、私費・校費の混用はできないか。

フロアの暗い所で、寝ている人がいて不気味である。

研究室等に分散配置されている資料は利用しにくい。

部局で支給されるコピーカードは、部局のコピー機だけでなく、どこのコピー機でも使えるようなものが良い。

これらに対し、開館時間の延長、貸出条件及びコピー機の状況については、これまでの改善の経緯が説明されたほか、ビニールカバーの装備の問題についても、意見交換を行いました。また、昨年も出された研究室にある図書資料の利用の不便さについても説明があり、利用者からの意見、要望等については検討・対応しているとのこと、メールなどで提出してほしいと館長からコメントがありました。



懇談会の様子



博物館第35回特別講演会 「脳神経外科医療の歴史と進歩」を開催

- 企画展「日本脳神経外科学の開拓者 齋藤 眞」に関連して -

博物館は、第4回名古屋大学博物館企画展「日本脳神経外科学の開拓者 齋藤 眞」に関連して、10月22日(金)、第35回特別講演会を開催しました。

今回は、吉田 純医学系研究科教授が「脳神経外科医療の歴史と進歩」と題して、約70名の市民・教職員・学生で満員となった博物館講義室で講演を行いました。また、齋藤先生の六男の齋藤喜九雄氏をはじめ、齋藤家ゆかりの方々も出席しました。

講演は、南米のインカ遺跡で見つかった脳手術跡のある頭蓋骨標本の話から始まり、我が国の脳神経外科学のパイオニアで、日本脳神経外科学会の創設者でもあった名古屋大学医学部教授の齋藤 眞先生(1889 - 1950)の世界的な脳神経外科学研究と治療法が紹介されました。吉田教授は、昭和15年に医学教育用に撮影され、齋藤先生のナレーション入りで、戦災で焼失したと思われる幻の脳手術フィルムの映像を使って、当時の本学の脳外科学分野での医療レベルの高さについて分かりやすく解説し、参加者は鮮明な脳腫瘍手術

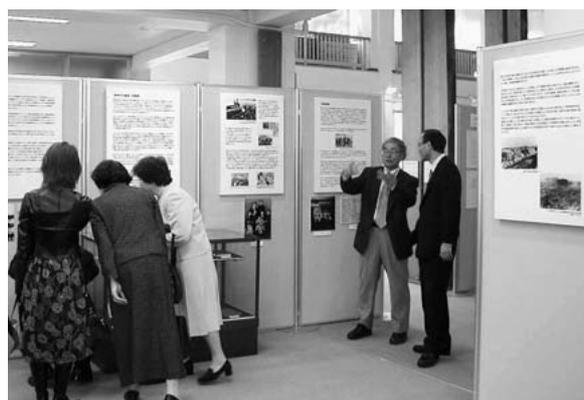
の迫力ある映像を食い入るように見ていました。また、吉田教授は最新の脳神経外科医療の問題点や三次元画像を使った脳血管の顕微鏡手術等についても解説しました。

講演の後半では、近未来の脳神経外科医療について、現在、吉田教授が中心となって進めている救急医療ネットワークのデモンストレーション映像を使って解説が行われました。吉田教授は、これまでの「患者相手の医療」から、これからの「健常者相手の予防医療」の必要性について分かりやすく説明しました。

講演後の質疑応答では、「現在、脳治療を受けているが、今のままでいいのか」、「脳ドックで何がどこまでわかるのか」、「救急医療体制ができると、名医にかかることができるのか」等の参加者の質問に対して、吉田教授が的確に答えていました。また、講演会終了後には、企画展をじっくり見直す参加者の姿も多く見られました。



講演する吉田医学系研究科教授



講演会終了後、企画展をじっくり見直す参加者



エトピア科学研究機構が 中部電力株式会社と連携実施協定を締結

- エネルギー・環境分野などで連携研究 -

エトピア科学研究機構は、10月14日(木)、松井機構長と清水中部電力株式会社常務取締役技術開発本部長との間で連携実施協定書に署名し、同協定を締結しました。

この協定は、本学の学内部局横断型組織であるエトピア科学研究機構と中部電力株式会社技術開発本部との間で双方の研究開発の強化、加速及び学術研究活動の活性化を図るとともに、研究者・技術者の育成に貢献することを目的としており、具体的には、エネルギー・環境・材料・情報をはじめ広い分野での連携研究(共同研究・受託研究)の実施、最新技術に関する情報交換及びそれに基づく研究テーマの発掘、研究者、技術者及び大学院学生の育成の3項目で連携していきます。また、この協定を円滑に推進するために、双方の代表者からなる「連携協議会」とその下部組織の「技術情報交換会」及び個別の連携研究を推進する「研究推進チーム」が組織され、連携項目につい

て協議し実施されます。なお、協定の有効期間は、協定締結日から平成20年3月31日までとし、双方に異議がなければ以後1年間の延長(自動延長条項付)がされることになっています。

これまでも、本学と中部電力株式会社とは、分野ごとの研究を個々に実施しており、同研究機構にも、「エネルギーシステム(中部電力)寄附研究部門」が設置されています。同研究部門は、平成8年度に設置され、4年間1期で、現在3期目(平成16年度~19年度)となっています。今後は、連携協議会の主導のもと、同研究機構と技術開発本部全体でニーズ・シーズのマッチングを図ることにより、多分野にまたがる複合的な研究テーマでの連携も可能になるとともに、研究の実施にあたっては、双方の各関連分野の研究者が有機的に連携することにより、効果的・効率的な研究推進が期待できるなど、双方にとって、より有益な連携活動が展開できます。



協定締結後、握手を交わす松井機構長(右)と清水中部電力常務取締役技術開発本部長(左)



エコトピア科学研究機構

環境パートナーシップ・CLUB と連携実施協定を締結 - 環境分野で産学官連携 -

エコトピア科学研究機構は、10月1日(金) 松井機構長と池淵浩介環境パートナーシップ・CLUB 会長(トヨタ自動車株式会社副社長)との間で連携実施協定書に署名し、同協定を締結しました。

この協定は、環境に調和した21世紀の循環型社会の構築に向けて、エコトピア科学研究機構と環境パートナーシップ・CLUB が、それぞれの研究・広報活動の活性化を図るとともに、情報交換及び研究者・技術者・大学院学生等の交流と育成に協力することを目的としています。協定の有効期間は、協定締結日から3年間で、双方に異議がなければ以後1年間の延長(自動延長条項付)がされることになっています。

エコトピア科学研究機構は、持続可能理想社会(エコトピア)の構築に向けて、「物質とエネルギーの循環・再生と人間との調和」を切り口にして、自然科学と人文社会科学が融合した学際研究を行う部局横断型研究拠点を目指しています。一方、環境パートナーシップ・CLUB は、ものづくりの世界的集積拠点である中部地域の200社以上の企業に、愛知県・名古屋市等が加わった産官連合体であり、環境調和型社会構築に向けて幅広い活動を行っています。今回の協定により、エコトピア科学研究機構と環境パートナーシップ・CLUB の連携・協力が強化され、その活動が広く認められ、21世紀型理想社会の実現のための産学官連携が系統的に発展していくことが期待されています。



評価企画室が発足する - 平野総長が室員を激励 -

評価企画室の看板上掲式が、10月14日(木) 平野総長、山下理事、松下評価企画室長の出席のもと行われました。

評価企画室は、平成13年2月に設置された評価情報分析室の機能を拡大し、大学の運営・経営戦略のための企画・立案を支援する組織に位置付けるため、発展的に改組し、本年10月1日に発足したものです。

国立大学法人は、6年間で達成すべき業務運営の中期目標を立て、それを達成するための中期計画を立て、さらに中期計画に基づく年度ごとの計画を立て運営する必要があります。

その支援組織として設置された評価企画室は、中期目標で謳っている「大学運営の透明性を確保し、的確な自己点検・評価に基づく情報公開を積極的に行い、社会に対するアカウンタビリティを強化する。」を達成するため、本学を構成する各部局、そして部局の構成員である各個人への評価を有機的な関係をもって可視化し、評価結果を運営改善に活かすことが求められています。

本学が法人化したことに伴い、国立大学法人評価委員会による「国立大学法人評価」や公的に認められた機関による「認証評価」を受けることが義務付けられたことに加え、大学の運営、経営企画についてデータを基に立案する機能が不可欠になっています。評価企画室には、部局を通じて構成員の活動状況を調査し、収集基礎データを分析して自己点検・評価に活かすだけでなく、分析結果を基に本学のもつ個性と問題点を絞り、個性の伸展法や問題点の改善指針を示すことにより、大学の経営・管理部門の支えとなることが期待されています。



看板上掲式の様子



大学院工学研究科

社会連携室を新たに立ち上げる

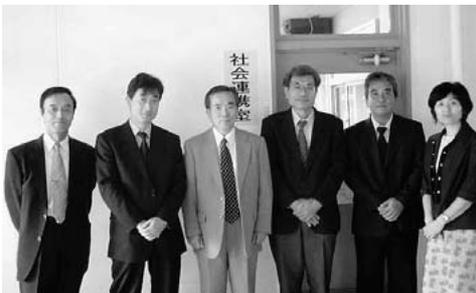
大学院工学研究科は、10月1日(金)社会連携室を工学部管理棟1階に新たに立ち上げました。

同研究科は、他研究科と比べると、社会とのつながりが強く、特に産業への貢献等具体的な事業を通して、地域の発展に貢献することが同研究科に与えられた大きな課題であるとの考えから、より一層の社会貢献活動を強めるために、社会連携室を設置しました。

社会連携室は、産学連携の対外的な窓口としての役割を果たし、具体的には、外部資金の受入れ関係、広報活動、知的財産権等の業務を中心に行います。将来的には、同研究科における長期的な社会連携のあり方、産学連携の方針、戦略等を企画立案する機能を有する室として発展させ、産と学との総合的な連携を図り、情報の収集と発信をはじめとする地域貢献の中核的な拠点として活動する組織を目指していきます。

[社会連携室の主な掌握業務]

1. 各種競争的資金の確保に関する事
2. 企業との共同研究に関する事
3. 受託研究に関する事
4. 寄附金に関する事
5. 科学研究費補助金に関する事
6. 研究協力に係る連携協定締結に関する事
7. 知的財産権(発明・特許等)に関する事
8. 広報に関する事
9. 社会連携委員会その他関係委員会に関する事
10. 学術振興会特別研究員その他研究員の受け入れに関する事
11. 教員データに関する事
12. 各種研究助成に関する事
13. その他



看板上掲の様子



博物館所蔵「栄衛中経図」の解読完了

- 杉山文学研究科教授が博物館で記者発表 -

博物館は、昨年末に、医師の富田洋氏から「栄衛中経図」(えいえちゅうけいず)の寄贈を受け、破損修復後、杉山寛行文学研究科教授に漢文の解読と研究を委嘱していました。このたび、杉山教授によって初めて全文が解読されたのを受けて、10月15日(金)、博物館において記者発表が行われました。

「栄衛中経図」は、江戸時代後期の鍼灸の名医で將軍徳川家斉の侍医を務めた石坂宗哲(1770~1841)が文政8(1825)年に刊行した血管図で、公的機関では、名古屋大学博物館、千葉大学附属図書館、オランダのライデン大学及びフランスのパリ国立図書館の4か所しか所蔵が確認されていません。

記者発表で、杉山教授は、石坂が中国医学の基本原理解である経絡(けいらく)説を西洋医学で明らかにされた血管分布に基づいて新しく解釈し、中国医学の伝統的な見方のいくつかを批判していることが今回の解読で判明したこと、また、西洋医学の成果に直面した石坂が、軸足を漢方医学においてその優位を主張しつつ、西洋医学との折衷をはかったことを詳しく紹介し、記者から質問が相次ぎました。

なお、栄衛中経図の解読結果については、今年度の名古屋大学博物館報告第20号に掲載されることになっています。



記者発表する杉山文学研究科教授



博物館野外観察園セミナーハウスの 本格的活用がはじまる

博物館野外観察園セミナーハウスを利用した初めての授業である博物館実習が2つ、8月31日(火)から9月6日(月)まで、博物館専任教員の担当で実施されました。

このセミナーハウスは、野外観察園を教育、研究及び大学開放に活用するため、平成16年3月末に同園に隣接して建てられたプレハブ2階建ての施設です。

今回の実習は、学芸員資格取得のための必須の授業で、3年生を中心とした学部学生や大学院学生約40名が受講しました。最初の実習では、植物と土壌動物の採集及び標本作製の技術を学び、実際に展示物を作成しました。受講者は、観察園で採集した様々な植物や土壌動物をひとつひとつ丁寧に標本にした後、これらの形態を詳しく観察し、学名を調べました。最後に、「生き物の形のいろいろ・形のおもしろさ」をテーマとした展示を見事に完成させました。二つ目の実習では、魚の骨の標本作成と土器修復に取り組み、顕微鏡を使ったハンズオンコーナーのプランを立てました。

受講者の多くは理学部の学生でしたが、なかには文学部や教育学部の学生もいて、動植物を初めて詳しく観察して生物の形や機能の面白さに驚いたとか、顕微鏡の構造の巧みさに感心したとの感想も聞かれました。

このセミナーハウスは、今後も様々な催しに活用されることになっており、11月27日(土)に開催された秋の野外実習「ドングリのサイエンス」でも利用されました。



作成した展示を合評する受講者



平成16年度

医学部医学科公開講座を開催 - 動物から感染する新しい病気 -

医学部は、10月8日(金) 鶴友会館において、「動物から感染する新しい病気」をテーマに、平成16年度医学部医学科公開講座を開催しました。

本来、動物や鳥にのみ留まっていた牛海綿状脳症(BSE)、サーズ(SARS)、鳥インフルエンザが、物、食料品、動物及び人の地球レベルの交流により、瞬く間のうちに人への感染を拡大し、多くの命を奪うという過去に経験のない状況が起き、人々の不安をかきたててきました。こうした状況を踏まえ、今年度は、これらの病気の正確な知識(これらの病原体が本来寄生する動物、人への感染経路、感染症状等)を得て不安を解消し、正しい感染予防の方法を身に付けて、安心かつ安全な生活を送ってもらうために、このテーマを取り上げました。

当日は、コーディネーターの富田 靖医学系研究科教授の司会進行のもと、道勇 学同研究科講師による「牛海綿状脳症(BSE)」、長谷川好規医学部附属病院呼吸器内科講師による「サーズ(SARS)」、木村 宏同病院小児科講師による「鳥インフルエンザ」、須藤千春同研究科助教授による「ペット感染症(人畜共通感染症)」の講義が行われ、行政・医療関係者、会社員、主婦、学生等、20代から80代までの約40名が受講しました。



講義する長谷川医学部附属病院講師



農学国際教育協力研究センター

第6回オープンフォーラムを開催

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、10月1日（金）豊田講堂第1会議室において、「オンライン教育のためのカリキュラム開発」をテーマに、第6回オープンフォーラムを開催しました。

フォーラムには、AAACU 事務局長のアルセニオ・バリサカン博士、同副委員長のシーファ・チェング国立中興大学農業資源学部長、イエヌ・ワン国立中興大学教授をはじめ、この一年間、ICCAE 客員教授・研究員としてカリキュラム開発に携わったリタ・ラウデフィリピン大学教授、エディス・セディコール SEARCA 部長、ツイリン・チェン国立中興大学助手、大学院生命農学研究科の関係者が出席して、第15回アジア農科系大学連合（AAACU）隔年会議（9月28日～30日 p23参照）を目指して、生命農学研究科とICCAE が共同で研究・開発してきた「AAACU 加盟校間の遠隔教育のためのeラーニング・システム」を実際に運営していく上での問題点について討議を行いました。討議は、eラーニング教育に加えるべきコースの選定・カリキュラム開発、単位認定制度、受講生登録制度、授業料、講義方法と著作権、コース内容の評価方法の項目ごとに行なわれ、当面は相手大学の担当教員との個人的な対応で運営するが、2年以内に組織的な対応が出来るように、項目ごとにガイドラインを明確にすることが確認されました。



オープンフォーラムの様子



附属農場

農業教育公園・自然観察会を開催

- よく飛ぶバッタはどのバッタかな？ -

大学院生命農学研究科附属農場は、9月26日（日）東郷町グリーンベルトの会と共催で、農業教育公園・自然観察会「よく飛ぶバッタはどのバッタかな？」を開催しました。

この観察会は、3年前から行われている地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」の一環として、初めて連携自治体と共同で開催したもので、子供と大人を合わせて30人ほどが参加しました。

当日は、自然観察員の資格を持ったグリーンベルトの会の会員2名による説明の後、参加者は、多目的広場、ウシやヤギの放牧場で、トノサマバッタやショウリョウバッタ（別名：オンブバッタ、キチキチバッタ、ハタオリバッタ）、クルマバッタなど、多くのバッタを採集しました。採集後、バッタの名前と体型の特徴を確認し、子供から大人まで参加してバッタの飛距離の競争をしました。最も跳んだのはトノサマバッタで、なかには、50メートル以上も跳んで、大きな松の木を越え、測定不能となったものもありました。

なお、現在、将来計画を策定する段階ではありますが、東郷町及びグリーンベルトの会と共同で、附属農場内にビオトープを整備する計画があります。



バッタを採集する前に説明を受ける参加者



平成16年

秋の叙勲受章者が発表される - 本学関係者5名が喜びの受章 -

平成16年秋の叙勲の受章者が発表され、本学関係者では次の方々が受章されました。

瑞宝中綬章

小川 利夫(78) 名誉教授
元教育学部長
元愛知大学特任教授

瑞宝中綬章

奥田 孝美(79) 名誉教授
元大同工業大学教授

瑞宝中綬章

熊田 信夫(79) 名誉教授

瑞宝中綬章

佐藤 自郎(78) 名誉教授
元文学研究科長
元名古屋学院大学学長

瑞宝双光章

中尾 一(76) 元施設部長



メンタルヘルスケア講習会を開催 - 職場のストレスについて -

メンタルヘルスケア講習会が、全国労働衛生週間のうち、本学がメンタルヘルスの日に定めた10月6日(水)、シンポジオンホールにおいて、管理監督者等職員等を対象に開催されました。

本学は、今年4月から労働安全衛生法に基づく安全衛生委員会を開催し、メンタルヘルスを含む衛生問題についても検討しています。この講習会は、快適な職場環境の促進を図ることを目的として、「職場のストレスについて」をテーマに開催されました。

講習会では、初めに、病院・環境安全関係担当の中島理事から、講習会の趣旨等の説明があった後、本学東山地区産業医の小川豊昭総合保健体育科学センター教授から「人間関係のこつ」と題して、ストレスの原因と予防等について講演がありました。続いて、津田均同センター助教から、「職場の監督者としての対応法」と題して、精神疾患は誰でもかかる可能性のある病気であること、発病期から治療期、回復期までの適切な処置が必要であること等のメンタルヘルスの基礎知識や対処法について講演がありました。

講演終了後には、聴講者からの質問や小川教授への個別相談も多数寄せられるなど、メンタルヘルスに対する関心の高さを伺わせました。

本学では、講習会終了後実施したアンケート結果をもとに、講習会の開催等を通じて、心と体の健康づくりに取り組むことにしています。



講演する小川教授



熱心に聴講する参加者



平成16年度

名古屋大学職員創作美術展を開催

平成16年度名古屋大学職員創作美術展が、10月19日(火)から10月22日(金)までの4日間、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この美術展は、今年度で13回目を迎え、職員自ら創作活動を楽しみ、美術作品等の鑑賞を奨励するとともに、潤いのある情操豊かな生活、余暇の一層充実した活用を促し、生活に根ざした文化の普及・高揚に資することを目的として開催されているものです。今回は、絵画、絵手紙、陶芸、写真、おし花、書道、彫刻及び手工芸と幅広く、多くの力作が展示され、鑑賞に訪れた延べ250名近い職員等は、芸術の秋を心ゆくまで満喫していました。



作品を鑑賞する職員



平成16年度

愛知地区国立大学法人等退職準備セミナーを開催

平成16年度愛知地区国立大学法人等退職準備セミナーが、10月25日(月)、シンポジオンホールにおいて、本学と愛知教育大学、名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、豊田工業高等専門学校及び自然科学研究機構岡崎地区の5機関との共催により開催されました。

このセミナーは、愛知県に所在する国立大学法人等の文部科学省共済組合員で、平成16年度から平成20年度までの定年等退職予定者及びその配偶者を対象とし、退職にあたっての心構えと退職後の生活設計に必要な知識を提供することにより、将来への不安を解消し、今後の社会生活、家庭生活の基盤づくりに役立てることを目的とした“退職準備型セミナー”として毎年開催しているもので、今回は114名の参加がありました。

セミナーでは、加藤武夫名古屋学芸大学事務局長から「定年後の苦労談と生きがいづくり」と題し、再就職にあたり意識を変えることの必要性について、木村好男住友信託銀行財務コンサルタントから「これからの経済生活設計」と題し、退職後の資産管理のあり方について、押田芳治総合保健体育科学センター教授から「定年後の健康管理と健康増進」と題し、生活習慣病予防のための運動療法について講演がありました。また、事務担当者による退職手当、退職共済年金制度、退職後の医療制度等の説明があり、参加者は熱心に聴講していました。



講演する加藤名古屋学芸大学事務局長



熱心に聴講する参加者



名古屋大学体育会発足50周年記念式典を開催



あいさつする平野総長

名古屋大学体育会は、台風一過の好天に恵まれた10月10日(日)、豊田講堂第1会議室において体育会OB総会を、その後、シンポジオンホールにおいて発足50周年記念式典を開催しました。

名古屋大学体育会は、主に運動部所属の学生による自主運営組織であり、狭義には運動部の総括を、広義には大学構成員へのスポーツ活動の普及を図ること等を目的として発足したもので、昭和36年に大学公認となり、現在46の運動部が所属しています。

記念式典には、名古屋大学体育委員会会長の平野総長、副会長の若尾副総長、愛知県議会議員の桜井治幸氏をはじめとする体育会OBの方々、七大戦参加大学の体育会関係者など、名古屋大学体育会にゆかりの深い約70名が参加しました。初めに、平野総長から「大学は、ただ単に知識の吸収の場であるばかりでなく、全人教育の場であり、全人教育にあつては、課外活動である部活動が果たす

役割は大きい。心身を磨き、学問的にも人間的にも大きく成長されることを期待する。」とあいさつがありました。参加者は、和やかな雰囲気の中、旧交を温め、最後に、参加者全員で伊吹おろし(第八高等学校寮歌)を合唱しました。

- 体育会50周年を迎えて -

我々体育会は50周年という節目を迎え、常任委員一同先達が築いてきた歩みに思いを馳せ感慨に浸るとともに、身の引き締まる思いをしています。

現状を維持させつつも時代のニーズを取り入れ、更なる発展を導き次の代に繋げていくという責務を果たせるよう、常任委員一丸となって励んでいく所存です。今後とも体育会の活動に対し、御理解と御援助の程よろしくお願いします。

名古屋大学体育会



平野総長、若尾副総長を囲んでの記念撮影



イベントカレンダー

開催月日 イ ベ ント ・ 概 要

9 .11 ~ 3 .5 オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」

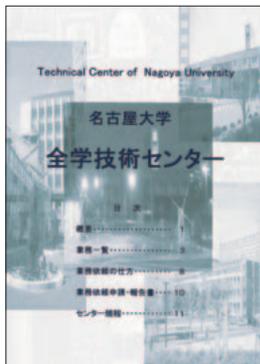


目 的：高校生に、出来るだけわかりやすく、大学の研究室で行われている最新の研究やその熱意を伝えること
 場 所：文系総合館カンファレンスホール
 時 間：10時～12時
 対 象：高校生、社会人
 回 数：10回（いずれも土曜日）
<http://www.oc.soec.nagoya-u.ac.jp/>
 連 絡 先：大学院経済学研究科エクステンション・サービス 052 - 788 - 6197

12 .11 農業教育公園・講演会 第4回

場 所：大学院生命農学研究科附属農場・農業館
 時 間：14時～16時
 講 師：山内章生命農学研究科教授
 演 題：私たちの暮らしや食べ物と海外の農業
 連 絡 先：大学院生命農学研究科附属農場 0561 - 37 - 0200

12 .16 技術支援の説明会（全学技術センター）



主 催：全学技術センター
 場 所：シンポジウムホール
 時 間：15時～17時
 内 容：本年4月1日に設置された全学技術センターは、全学の技術支援を効果的に行えるよう、従来の技術部組織を再編し設置された技術職員の組織です。このたび、センターパンフレット（左の写真）の配付とともに、技術支援の依頼方法・実施に関する説明会を上記のとおり開催しますので、多数の御参加をお待ちしております。
 連 絡 先：総務企画部人事労務課第一給与掛 052 - 789 - 2032

2 22 第8回高等研究院セミナー

場 所：高等総合研究館カンファレンスホール
 時 間：17時～
 講演者：岡田 猛教育発達科学研究科教授（高等研究院流動教員）「芸術創作プロセスの理解に向けて」（仮題）
 講演者：関 一彦物質科学国際研究センター教授（高等研究院流動教員）「有機分子で電気や光をあやつる」（仮題）
 連 絡 先：研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛 052 - 788 - 6051

本学関係の新聞記事掲載一覧（16年10月分）

	記事	月日	新聞等名
1	テクノフェア・名大2004が9月30日にIB電子情報館で開催	10.1(金)	中日(朝刊)
2	スズケンが環境医学研究所の不整脈に関する研究部門に7500万円の助成金を出すと発表 これを受けて環境医学研究所に「突然死」を解明する寄附研究部門を開設	10.1(金) 10.5(火)	毎日(朝刊) 日経(朝刊)
3	「関節リウマチの今後の治療」をテーマに医学部附属病院のリウマチ専門医が講演	10.1(金)	中日(朝刊)
4	「企業美学コンテスト」が豊田講堂で11日に開催	10.1(金)	朝日(朝刊)
5	アップデート：茂登山清文・情報科学研究科助教授 アートを見に大学へ行く	10.1(金)	朝日(夕刊)
6	中日ドラゴンズ セ・リーグ優勝 各界の“竜党”喜びの声：平野真一総長コメント	10.2(土)	中日(朝刊)
7	野生化アライグマ急増中 織田銃一・生命農学研究科助教授「繁殖は想像以上」	10.3(日)	中日(朝刊)
8	高等研究院の04年度研究プロジェクトに「生物時計」のメカニズム解明など11件を採択	10.4(月)	日刊工業
9	教育学部附属高校は来年度本学教員の出張講義を正規の授業として開設 また「特別推薦枠」として意欲的な新入生を募集	10.4(月)	毎日(朝刊)
10	第63回日本脳神経外科学会会長・吉田純・医学系研究科教授に聞く 新しい医療の開発	10.5(火)	読売
11	名大サロンの主役：岡田猛・教育発達科学研究科助教授 落書きで気韻生動	10.5(火)	中日(朝刊)
12	「講義としての芸術」芸術団体「メディアセレクト」（代表世話人・茂登山清文・情報科学研究科助教授）と社会連携推進室共催 豊田講堂で10日まで開催	10.5(火) 10.9(土)	中日(朝刊)
13	教育学部附属中学・高校 来年度の生徒募集要項を発表	10.5(火)	読売
14	日本脳外科学総会（会長・吉田純・医学系研究科教授）の市民講座が9日開催	10.6(水)	中日(朝刊)
15	国際シンポジウム22日23日開催 開発における法の役割 法と開発：その理論と展望」をテーマに市橋克哉・法学研究科教授らが講演	10.6(水)	読売

	記事	月日	新聞等名
16	愛知県「あいち地球温暖化防止戦略」の策定を急ピッチで進める 新戦略のあり方について柳下正治・環境学研究科教授「個人が無理なく行動できるような実践の仕組み」盛り込むべきと指摘	10.6(水)	日経(夕刊)
17	中島務・医学系研究科教授らのグループ ウイルスを使つての頭頸部のがんへの臨床試験を始める	10.7(木)	読売
18	中部の医療：本学の取り組む最先端とされる「ウイルス療法」の研究現場を追う	10.7(木) 10.21(木) 10.28(木)	読売
19	老年学：禁煙の不安時間が解決 井口昭久・医学系研究科教授	10.7(木)	朝日(朝刊)
20	新幹線40歳：林良嗣・環境学研究科教授「新幹線は“進化”している」	10.7(木)	読売
21	名古屋大学 新瑞橋間が新たに開通し、市営地下鉄名城線が全国初の地下鉄環状運転を始める	10.7(木)	中日(朝刊)
22	医学の現場から：在宅血液透析の利点と課題 中井滋・医学部附属病院講師に聞く	10.8(金)	中日(朝刊)
23	迫る巨大地震：本学など約60箇所に試験的に配信されている「緊急地震速報」 警鐘速歩するも避難に鈍さ	10.8(金)	朝日(朝刊)
24	環境パートナーシップ・CLUBとエコトピア科学研究機構との間で連携実施協定締結 環境への取り組み 産学官の地域連携強化	10.9(土)	中日(朝刊)
25	意外に賢い鳥あたま：松島俊也・生命農学研究科助教授「大脳皮質の働きもある」と説明	10.9(土)	朝日(夕刊)
26	東海地方9月の地震：林能成・災害対策室助手	10.9(土)	読売
27	福和伸夫・環境学研究科教授「来るべき巨大地震と防災対策」基調講演12日開催	10.9(土)	中日(朝刊)
28	本学留学生会 23日に新人留学生の生活支援のバザー開催 バザー用品の提供16日～22日受付	10.10(日)	毎日(朝刊)
29	本学COE「統合テキスト科学の構築」第17回オープン・レクチャー13日開催	10.10(日)	中日(朝刊)
30	災害対策室などの研究グループ 三河地震被害を絵画に	10.11(月)	日経(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
31	地震の話：検証浜岡原発 安藤雅孝・環境学研究科教授ら予測超す揺れの可能性指摘	10.11(月)	朝日(朝刊)
32	時のおもり：池内了・理学研究科教授 遺伝子と環境の調和が大事	10.11(月)	中日(朝刊)
33	22日にぜん息の予防と早期治療についての講演会 坂本龍雄・医学部附属病院講師	10.12(火)	日経(夕刊)
34	愛知県管工機材商業協同組合開催の「管工機材・設備総合展」に本学学生など大学生参加	10.13(水)	朝日(朝刊)
35	なごや考：本山原人進化論 本学インターンシップ生執筆	10.14(木) 10.15(金) 10.16(土)	毎日(夕刊)
36	中部電力の技術開発本部とエコトピア科学研究機構が共同研究に取り組む連携実施協定を締結	10.15(金)	中日(朝刊) 日経(朝刊) 読売
37	「日本脳神経外科学の開拓者 齋藤眞」展が本学博物館で開催 22日には吉田純・医学系研究科教授が「脳神経外科医療の歴史と進歩」と題して講演	10.15(金)	中日(朝刊)
38	「ITS 世界会議 愛知・2004」18日から24日まで名古屋で開催 東海総合通信局のITS 調査研究会(座長・森川高行・環境学研究科教授)主催の「ITS 情報通信体験ツアー」では地上デジタル放送とカーナビを組み合わせた最新のITS技術を公開	10.15(金) 10.18(月) 10.19(火)	日経(朝刊) 朝日(夕刊) 読売
39	西区浄心中学校が国際交流集会「六十億の一人としてかけがえない一人として」開催 バングラデシュから来日のベガム・シャムシャド・ルーシーさん・本学研究生がバングラデシュの現況を講演	10.15(金)	中日(朝刊)
40	理化学研究所が20日に科学講演会「分子から始まる新しい科学」開催 理化学研究所理事長・野依良治・本学特任教授も講演	10.15(金) 10.18(月)	日刊工業
41	ニッポン見聞録：韓秀蘭さん・本学大学院生 身近な温暖化対策	10.15(金)	朝日(夕刊)
42	輝いて万博人：伊藤繁・理学研究科教授 北極圏の植物を日本で展示	10.16(土)	日経(夕刊)
43	だから・からだゼミナール「ふしぎフシギ!?きみの目を調べよう」講師に宮尾克・情報連携基盤センター教授	10.16(土)	朝日(朝刊)
44	本学東山キャンパス 創立以来の変遷伝える立体模型を大学文書資料室が製作 17日に全学同窓会総会で披露	10.17(日)	中日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
45	経済産業省支援の電子カルテ26地域中10が休止 山内一信・医学系研究科教授は「導入の必要性について参加機関の共通認識を」	10.17(日)	朝日(朝刊)
46	江原康太郎さん・医学部保健学科4年生が全国学生相撲個人体重別選手権65キロ未満級で初優勝	10.18(月)	中日(朝刊)
47	日本数学コンクール委員会(会長・山下廣順・本学理事)は数学セミナー「数理ウェブ」23日開催 数学コンクール入賞者らが講演	10.19(火)	中日(朝刊)
48	「ITS世界会議 愛知・名古屋2004」で「P-DRGS コンソーシアム」(統括代表・森川高行・環境学研究科教授)がより正確な渋滞予測を実現するナビシステム「PRONAVI」発表	10.20(水) 10.22(金)	朝日(朝刊) 中日(朝刊) 日経(朝刊)
49	男女共同参画月間記念イベント「男ときどき女(モード) 教師の私と、親である私」田村哲樹・法学研究科助教授らのトークなど	10.20(水)	中日(朝刊)
50	愛知県留学生交流推進協議会(議長・平野眞一総長)は愛・地球博への地元の留学生の積極的な参加を求めた要望書を万博協会に提出	10.21(木)	毎日(朝刊)
51	医学の現場から：パーキンソン病の現状について 吉田純・医学系研究科教授、梶田泰一・医学部附属病院講師に聞く	10.22(金)	中日(朝刊)
52	理化学研究所理事長・野依良治・本学特任教授と小柴昌俊東大名誉教授、有馬朗人元東大総長らが義務教育費国庫負担制の廃止に反対するメッセージ	10.22(金)	日経(朝刊) 他5社
53	ITS 世界会議 愛知・名古屋2004の大学出展ブースに注目 中村英樹・工学研究科助教授は「従来以上の積極さ」討論会では森川高行・環境学研究科教授が「官民協力が大切」と語る	10.22(金) 10.22(金)	毎日(夕刊) 朝日(夕刊)
54	本学陸上部マネージャー・土本紘子さん「夢をかなえてくれた選手たちに感謝」	10.22(金)	朝日(夕刊)
55	「開発における法の役割 法と開発：その理論と展望」法学研究科主催の国際シンポジウム開幕 森島昭夫・本学名誉教授「法と開発における日本の取り組み」報告	10.23(土)	中日(朝刊)
56	本学学生らメンバー「名古屋を元気にする会」と松原武久名古屋市長が市政や万博テーマに座談会	10.23(土)	毎日(朝刊) 中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
57	なごや考：なごや駐め エコポイント TDM の実験を進める森川高行・環境学研究科教授は「本当に住民に優しい車社会が生まれてくると信じています」	10 23(土)	毎日(朝刊)
58	理学研究科教授会は22日大峯巖・理学研究科教授を理学研究科長・理学部長に再任	10 23(土)	中日(朝刊) 読売
59	新潟県中越地震 鈴木康弘・環境学研究科教授、安藤雅孝・環境学研究科教授コメント	10 24(日) 10 25(月)	朝日(朝刊) 中日(朝刊) 毎日(朝刊)
60	新潟県中越地震発生を受け本学など研究グループが現地入り 鷲谷威・環境学研究科助教授らのグループはGPSの観測点を5箇所に設置 地震のメカニズムを調べる	10 25(月)	中日(朝刊)
61	「ITS世界会議 愛知・名古屋2004」最終日 森川高行・環境学研究科教授ら実行委員会主催の「市民企画イベント」開催	10 25(月)	朝日(朝刊)
62	名古屋大学博物館・秋の野外実習「ドングリのサイエンス」27日開催	10 25(月)	中日(朝刊)
63	名大サロンの主役：特別サロン「環(わっ)！」 畝部俊也・文学研究科助教授、渡邊誠一郎・環境学研究科助教授、林良嗣・環境学研究科教授	10 26(火)	中日(朝刊)
64	土岐川・庄内川のこれから 座談会：コーディネーターに辻本哲郎・工学研究科教授	10 26(火)	中日(朝刊)
65	国際シンポジウム「マイクロ・ナノメカトロニクスとヒューマンサイエンス」10月31日から11月3日開催 本学COE「情報社会を担うマイクロナノメカトロニクス」や名古屋市などで作る実行委が主催	10 26(火)	中日(朝刊)
66	まるごと教育：法科大学院 本学法科大学院の取り組みをみる	10 26(火)	朝日(朝刊)
67	本学法学部の2～4年生5人 毎日新聞中部本社で2週間インタビュー体験感想	10 26(火) 10 27(水)	毎日(朝刊)
68	学生街ダンス：一人暮らし 丹羽亜衣さん・本学4年生 都会生活に適應?	10 26(火)	中日(朝刊)
69	原発を考える連続学習会 安藤雅孝・環境学研究科教授が「巨大地震にどう備えるか? 浜岡原発と東海・東南海地震」と題して話す	10 27(水)	朝日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
70	日本脳神経外科学会会長・吉田純・医学系研究科教授に今学会について聞く	10 27(水)	読売
71	井口治夫・環境学研究科助教授 米国社会 共和党と民主党の支持層によって二分	10 27(水)	毎日(朝刊)
72	名城線物語：名古屋大学駅 学生食堂	10 27(水)	朝日(夕刊)
73	医学部附属病院で治療を受けていたイラク人少年アッパース・アリ・アルマルキー君今月末に帰国 主治医の小島勢二・医学系研究科教授は「イラクで治療を続ければ完治する可能性ある」	10 28(木)	毎日(朝刊) 他3社
74	お茶の水女子大学は学長選考会議で次期学長に長浜バイオ大学バイオサイエンス学部教授・郷通子・本学名誉教授を選出	10 28(木)	日刊工業
75	赤崎勇・本学名誉教授 文化功労者として顕彰される	10 29(金) 10 30(土)	日経(夕刊) 他5社
76	第36回中日教育賞贈呈式開催 来賓の村上隆・教育発達科学研究科教授ら祝辞	10 29(金)	中日(夕刊)
77	アップデート：茂登山清文・情報科学研究科助教授 男女平等とアートの間	10 29(金)	朝日(夕刊)
78	アベル・ウボマさん・本学大学院生 石油産業とナイジェリア経済について研究	10 29(金)	朝日(夕刊)
79	「持っていますか? 自分流」11月21日開催 アージム・シンサラさん・本学大学院生ら「衣食住」テーマに話し合う	10 30(土)	朝日(朝刊)
80	本学などによる東海・東南海地震防災合同プロジェクト 31日に公開講座開催	10 30(土) 10 31(日)	中日(朝刊) 毎日(朝刊)
81	地震発生時の病院内の安全対策をテーマに福和伸夫・環境学研究科教授らが意見をかわすシンポジウム30日本学で開催	10 31(日)	中日(朝刊)
82	「サイエンス・パートナーシップ・プログラム」研究者招聘講座 梅原徳次・工学研究科教授が名城大付属高で講義	10 31(日)	中日(朝刊)
83	市営地下鉄名城線環状化記念シンポジウム「名古屋の地下鉄を語ろう」開催 パネリストに木方十根・工学研究科助手ら	10 31(日)	中日(朝刊)

名誉教授の研究資料等の恵贈について

先日の一部報道で、「名古屋大学は原則的に名誉教授らの個人的な資料を受け入れてない」との表現がありましたが、名誉教授が培ってきた研究は、本学にとって貴重なものですので、今後とも資料の提供をよろしくお願いいたします。

お詫びと訂正

名大トピックス No.137号（平成16年10月30日発行）

26ページの『キャンパスクローズアップ4 理学館』に誤りがありました。「平成16年11月、理学館が完成しました。」を「平成15年11月、理学館が完成しました。」と訂正させていただきます。慎んでお詫びします。

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。

総務企画部総務広報課広報掛

電話：052（789）2016

FAX：052（789）2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

③1加藤鏑五郎と名古屋大学

加藤鏑五郎（1883～1970）は、1910年代から60年代にかけて活躍した、当時の愛知県を代表する政党政治家です。名古屋市議、愛知県議をへて、1924（大正13）年には衆議院議員に初当選し、以後当選12回、通算で30年間もその職にありました。戦後は法務大臣や衆議院議長を歴任、勲一等旭日大綬章をうけています。

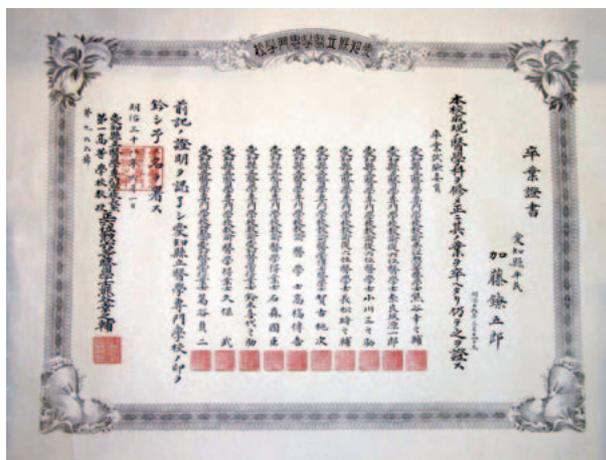
鏑五郎は、名古屋大学医学部の前身である愛知県立医学専門学校を1905（明治38）年に卒業し、医師となりますが、やがてかねてよりの志をはたすべく政治家への道を歩みました。ただそれ以後も、愛知医専の人脈がその政治活動をささえたといえます。鏑五郎も、愛知医専の大学昇格運動では県知事との交渉や県会での演説、官立名古屋医科大学発足時の鳩山一郎文部大臣との談判など、尽力をおしませんでした。

また鏑五郎は、1944（昭和19）年に名古屋帝国大学から医学博士号を授与されています（「ラッテ」胸腺ノ組織学的研究）。これは1937年の落選による約2年間の「浪人」時代、研究生となって名古屋医科大学に通い勉強した成果でした。戦時中の財団法人喜安病院の設立や、戦後の嫌煙薬「キンエン」の開発は、鏑五郎が名古屋（帝国）大学医学部との連携のもとにおこなった事業です。

一昨年、孫婿にあたる加藤延夫愛知医科大学学長（元名古屋大学総長）から、「加藤鏑五郎関係資料」が愛知県公文書館へ寄託されました。歴史的価値の高い大変貴重な史料群です。これについては、11月発行の『愛知県公文書館だより』第9号に紹介記事があります。



愛知医専時代の鏑五郎
（『加藤鏑五郎伝』より）



愛知医専の卒業証書（愛知県公文書館）



衆議院議員時代（1924年）
（『加藤鏑五郎伝』より）



名帝大の医学博士号学位記（愛知県公文書館）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、
大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡下さい。